

『吾輩は猫である』奇観

Junko Higasa 2016.4.5

第七章。蠅螂狩り、蟬取り、松滑り、垣巡りという運動をして、松脂と汗で毛衣が汚れた吾輩は、主人が行く洗湯せんとうとやらへ行ってみることにした。しかし万が一断られると困るので、まずは様子を伺うことにする。そして吾輩は、新旧の燃料が競い合う谷間を抜けて、硝子窓から建物の中を覗いて仰天する。

高みにある吾輩の視点は天、地上の人間は悉く裸である。即ち吾輩は、神の視点で、創造の原点である最も原始的な人間を俯瞰していることになる。

ここで第五章を振り返る。神は様々な人間の顔を作った。それで人間は顔によって己と他人を区別、あるいは差別するようになった。ところが寒月君と泥棒の顔は瓜二つである。これでは顔での身分識別は困難である。そこで今度は服装で人間を区分けすることにした。ところがその衣装を脱いでみると誰が誰やらわからない。『世界広しといえどもこんな奇観はまたとあるまい』競って文明の徒になりながら、喜んで原始に回帰するのはパラドックスである。そして『人間は全く服装で持っているのだ』衣装もまた、人間の中身を測る物差しにはなるまい。

洗湯の流しと板の間の中間は、着衣と裸の間、すなわち秩序と無秩序、理性と逆上の境界線である。この一線上で表裏反転する人間は、服で本性を隠しては競い合い、裸になればなったで赤裸々に競い合う。人間とは余程平等が嫌いな生き物らしい。